

## 令和3年度香川大学大学院修了式 学長告辞

本日、香川大学から修士の学位を授与される141名の皆さん、修士(専門職)の学位を授与される44名の皆さん、博士の学位を授与される32名の皆さん、誠におめでとうございます。とりわけ、今回学位を授与される20名の留学生の皆さんにおかれては、このコロナ禍の中で異国での生活によく耐え、研究成果を見事に結実されたこと嬉しく思います。本日修了式を迎えられた皆さんを直接指導された教員はもとより、香川大学の全教職員を代表して皆さんの努力に対して敬意と祝意を表します。

これで累計しますと香川大学が授与した修士号は5,527、修士号(専門職)は766、博士号は1,281となります。皆さんは大学院生として厳しい研究生生活を送り、教育学、法学、経済学、医学、工学、農学、経営学と言った多様な専門領域で日夜努力し、研鑽を積み、立派に研究成果を纏められました。特に、博士号を授与される医学系研究科の23名や工学研究科の9名の方々の研究テーマの内容を拝見しますと、生命科学分野から自然科学分野、人間工学分野や土木工学分野などまことに多岐にわたる分野に研究テーマが広がっています。しかし、どの研究テーマにも共通するのは、研究成果が何らかの形で人類の幸福な生活の維持・発展に寄与するものであるということです。今回博士号を授与される32名の皆さんの中で工学研究科博士後期課程の総代を務められ、尚且つ、学長表彰も授与される角野拓真さんの研究を少し紹介したいと思います。角野さんの研究テーマは、橋脚のリスクポテンシャルの評価方法と維持管理手

法に関するものでした。気候変動による豪雨災害や大規模地震などが想定される中で、橋脚の損壊を如何に未然に察知し、修理補強などにより回避させていくかを、河川の水位の変化などの膨大な数値データを解析し、人工知能を用いた精密なシミュレーションで解決方法を提案されています。この研究成果は、今後さらにブラッシュアップされて、老朽化を迎えた橋脚の損壊予防方法として日本はもとより世界中で活用されると思います。

さて、本日修了式を迎えられた皆さんは例外なく論文を書く作業に没頭されたと思います。多少私の偏った意見かもしれませんが、領域を問わず論文を完成させる過程は意外と単純で共通しているのではないのでしょうか。すなわち、「文献を読む」「よく考える」「論理的に書く」という作業の繰り返しだったのではないかと思います。一方、研究を始めるにあたって打ち立てた仮説を検証するためには適切な対象を選択して適切な物差しで測定し、証拠を示さないとはいけません。「測る」という作業は研究の基本中の基本であります。測定を通して証拠が得られたら再び「読む」「考える」「書く」の作業が始まります。大学院生活を通してみなさんが身に付けられた、この「読んで、考えて、書く」そして「測定する」という習慣こそが皆さんが大学院生活で得た大きな財産だと思います。この習慣は今後の皆さんの人生でも十分に生かされると思いますし、修了後も益々磨いていってほしい習慣であります。大学院生活で身に付けたこの科学的態度と論理的思考能力は、皆さんがこれから直面するあらゆる課題の解決にあたって大いに役立つことと思います。

人工知能が人の仕事の多くを肩代わりし、あらゆるものがインターネットでつながる高度電脳化社会が到来しております。しかし、こういった時代だからこそ、「読む」「考える」「書く」といった基礎的能力がより一層人間に求められると思われまふ。皆さんが香川大学大学院で培った経験と自信を活かして、香川県はもとより日本を、そして地球上に幸福で持続可能な社会を構築するため大いに貢献してください。

最後に、修了式を迎えられた皆さんにシンプルですがメッセージを贈ります。頭のどこか片隅にとどめておいてほしいメッセージです。それは、学びに修了はない、ということです。そして、学び続けることで自分を磨き続ける、ということです。「学び続ける」ことがこれからの社会で生き続ける必須条件になり、それが結果的に自分を磨き続けることになります。「学び続ける」ことが自分への投資にもなり成長につながります。香川大学の大学院は皆さんが今後何度でも学んでいただき、知識を更新していただき、ともに課題解決する機会を提供する大学院として改革を続けながらお待ちしております。いつでも帰ってきてください。皆さんの今後のご活躍を心より祈っております。

本日はまことにおめでとうございます。

令和4年3月24日

香川大学長 笥 善行